

本論文は、現代中国語文法の再構築を目的として、ダイクシス・アスペクト・ヴォイスという三つの文法範疇、及び複数の基本的構文を取り上げ、それぞれの現象に対してより一般性の高い記述を試みる作業を通じて、孤立語としての中国語文法のあり方の特質を解明したものである。

第Ⅰ部では、指示詞、三人称代名詞等を題材に、ダイクシス論が展開される。まず指示詞「这(コレ)」「那(ソレ)」の基本的性質として、それ自身が事物を表示する機能はなく、事物を「指さす」だけの指示機能を担う指示詞であるという注目すべき解釈が示される。それ故に事物を話し手が立脚する空間に定位する機能を持ち、同じく空間性を体現する方位詞との間に、二つの名詞句の接続機能他様々な用法が共有されていることを見出すなど、従来の研究に比べて格段に広がりとおと奥行きのあるダイクシス論となっている。

第Ⅱ部は、一般にアスペクト表示形式と見なされている4つの形式を取り上げ、事物や事柄を空間的に定位する動詞接辞「着」・文末助詞「呢」と、事柄や動作行為を時間的に定位する動詞接辞「了」・文末助詞「了」の二系統から成り立っていることを論証した。とりわけ「着」「呢」が空間系実存相を担うとする分析は、従来のアスペクト論に根本的な転換を迫るもので、理論的に極めて高い価値を持つ。

第Ⅲ部は、中国語文法研究ではとかく等閑にされがちなヴォイスを正面から論じたものである。受身構文と各種の使役構文とのプロトタイプ的な意味および構造の対立を有機的に関連付け、構文の文法化を視野に入れつつ整然と示されたその体系は、歴史的にも方言的にも極めて豊かつ複雑な現象を持つ中国語のヴォイス研究において、高い応用価値があると評価される。

第Ⅳ部では、これまで明解の得られなかった三つの構文を対象に、構文の意味と構造の解明が行われている。まず動詞に後接する“的”構文に関して、既然の動作行為の属性を措定する機能を持つとした上で、名詞を分類する作用を持つ構造助詞“的”からの拡張によって生じたと説明する。次に二重主語構文については、「経験的事態を表すタイプ」と「属性的事態を表すタイプ」という意味構造の異なる二つのタイプがあることを明らかにした。三つめとして、従来曖昧なままに存在文と一括りにされてきた“有”構文には、知覚的な存在を述べるタイプと概念的な存在を述べるタイプがあることを明らかにした。これらはいずれも構文論の精度を大幅に高めることに寄与している。

形態変化のない孤立語に属し、機能語にも乏しい中国語においては、言語形式が担う意味はほとんどが非頭在的なかたちで、形態や構造の中に組み込まれている。本論文は、乏しい資源を巧みに利用し、機能語と実質語の協働のもとに豊かな「虚」の意味を表現する現代中国語文法の姿を明快かつ周到に解き明かすことに成功しており、その成果と手法は、今後の中国語のみならず多くの言語研究における道標としての役割を果たすものとして高く評価される。本審査委員会が、本論文が博士(文学)の学位を授与するに相応しいと判断する所以である。